

第1557回（11月10日）

メキシコ中央地域における米生産

— モレロス州の農村調査から —

井 上 莊太郎

メキシコの中央高地、メキシコシティの南隣にあたるモレロス州では、現在、稲作の近代化を目指した我国の技術協力が実施されている。同州内では、米は手植え、手刈というかつての日本によく似た伝統的な栽培方法で生産されている。技術協力は、ここに日本式の稲作機械や肥培管理法を導入し、稲作技術の近代化を図ろうというものである。報告者はこの事業に参加し、田植機、コンバインの導入のための経済的な条件を検証することを主な目的として、同州内の稲作農家を対象とした実態調査を行った。

現在のモレロス州の稲作の特徴は主に以下の諸点にまとめられる。

(1) 人力で小区画を造り、その中に稲を移植し、手刈による収穫を行うという労働集約的な栽培であり、作業のほとんどが雇用労働力によって行われているため労働費の負担が大きく、その結果として生産費が高い。

(2) 高収量品種の普及と集約的な栽培によって極めて高い単収を得ている。

(3) 良質米であり、高値で取り引きされている。

(4) 農地改革が早期に実施された地域であるため、稲作の場合も小規模な生産者が多い。

(5) 主にさとうきび、トウモロコシ等との輪作によって栽培されているため価格条件によって作付面積の変動が大きい。

(6) 近年、他の作目と比較した収益性の低下から米の作付面積は減少気味である。

現時点では、農業機械を購入し、土地改良投資を負担するだけの資力のある農家はごく少数である。調査データを基に、一定の仮定の下、調査時における稲作労働の雇用賃金の水準と日本製の農業機械の価格、性能を比較

してみると、歩行4条型の田植機で約4.5ha程度、乗用2条型の自脱型コンバインでは13.9ha程度の作業規模があれば、雇用労働力を利用する場合と、機械を利用する場合の費用がほぼ均衡すると計算された。しかしながら、調査地域（同州南部中心）では2ha以下層の農家がほとんどであった。

ただし、州北部の、1圃場当たりの規模がより大きな地域では、中古の普通型コンバインを共同で大量に導入している事例がみられた。広い圃場という作業条件が確保されれば、むしろ普通型コンバインの方が普及の可能性が高いように観察された。

メキシコの稲作は、その広大な国土に対応して、大きく3種類の栽培様式に分類することができる。中央部の高地地帯では、人口稠密という条件の下、集約的な移植栽培が行われており、モレロス州はその中心地である。しかし、シナロア州等の北西部では、近代的な技術を利用しての大規模な、カリフォルニアに似た稲作が行われている。また、さらに粗放的な陸稲の栽培が南東部のメキシコ湾岸部を中心として広く行われている。メキシコの米生産の主流は、むしろ、こうした粗放的な生産を行っている北西部や南東部の産地にある。

モレロス州の米はこうした他地域の低コストの安価な米と競合している。したがって、生産の振興のためにはコストの低減を図らなければならないが、それに加えて、一層の品質改善による差別化も指向されている。この協力事業では、乾燥、粉摺、精米等の収穫後の技術についての協力も含まれており、これらの面での技術移転による品質改善への効果も期待されている。